

イスラマバードの北西、カブールの東

坂^{さか} 根^ね 義^{よし} 範^{のり}

フライトアテンダントに軽く体を揺すられて目が覚めた。アラビア海からペルシャ湾に入った辺りの上空、午前零時ころだろうか。

寝ぼけ眼で見上げると、彼女は、「シートベルトを締めるように」とだけ短く言っ歩き去った。

近くの乗客にも同じ注意を与えている。ジェット機は、気流の悪いエリアを突き進んでいるらしい。

機体の揺れが収まってから窓外に目をやると、街の光が広がっていた。陳腐な言い回しだが、「寶石を散りばめたような」という形容が相応しい様だった。これが着陸地ドバイの夜景なのかと思ったが、そのまま飛び続ける。アラブ首長国連邦(UAE)は砂漠の広がる国だとばかり思っていたが、眠らない街がいくつもあるようだった。

行ってしまった、のだ。

往路の目的地、パキスタン・イスラム共和国の首都イスラマバードへ向かう道程は、こんなハブニングから始まった。

未明のターミナル内をうろろした末、ようやくイスラマバード行き便を再予約することができた。航空会社の女性係員と意思疎通がうまくいかず、「私は、英語を話してるのよ」と鼻で笑うように言われ、ムカッときて「俺だって、英語で話してるんだぞ」と言い返し、険悪な空気になったりもした。

予約できたのは、約四〇時間後のフライトだった。ビザなしで入国できる気安さから、ドバイの街に出てみる。年末年始の一週間足らずの休みを利用した旅であり、日程延長は不可能なので、これでは、まるでドバイ観光に来たようなものではないかと苦笑いした。

パキスタンへ短い旅をしたのは、世紀が変わって少し経った頃だった。

当時は勤め人であり、年に一〜二回の短い休暇を利用しては、いわゆるバックパッカーとして、西へ西へと断続的に一人旅が続いていた。

東京のパキスタン大使館へパスポートを郵送すると、一週間程度で、ビザのシールが貼られて返ってきた。パ

私が乗る大韓航空機は、予定よりかなり遅れてドバイに到着した。ターミナルに降り立ったのは、乗換予定のイスラマバード行きエミレーツ航空機が発券する一〇分前だった。

一応、出発カウンターへ走ってみたが、やはり駄目だった。少し引きつった笑顔を作り、カウンターのグラインドホステスに、

「EK610便に乗りたくないんだけど……」

と言うと、彼女は、真っ直ぐにこちらを見返ししながら、あまり抑揚をつけずに、

「イット ハズ ゴーン (It has gone.)」

とだけ、あっさり答えた。たった三語の現在完了形が、その場の状況を最も確に言い表していた。

キスタンに関する予備知識は殆どなく、首都イスラマバードから入国した後は、モヘンジョ・ダロかハラッパのインダス文明の遺跡を訪れるつもりだった。が、本屋で、手にしたガイドブックをパラパラめくると、「ガンダーラ遺跡群について」と題するページが目に残った。

不覚にも、かつてガンダーラと呼ばれていた地が、現代ではパキスタン領内にあるのだという認識が全く欠けていた。以前、三蔵法師玄奘^{げんじょう}の「大唐西域記」の訳本を少し読んだ憶えはあったが、訪れた土地々々の主産物や国土の広さなどに関する記載が長々と続くのですぐに飽きてしまい、当然、ガンダーラの描写に辿り着く前に挫折していた。

だから、私にとってガンダーラのイメージは、小学生時分に見た、夏目雅子さんが玄奘に扮したテレビドラマ『西遊記』に拠るものが全てであった。ゴダイゴが歌うドラマのエンディング曲『ガンダーラ』では、「どうしたら行けるのだろう、教えて欲しい」と歌われていたので、ガンダーラは既に地上から跡形もなく滅んで久しく、所在さえも明らかでないものとはかり思い込んでいた。

それから二〇年以上が経ち、ガイドブックを繰って、突然、ガンダーラが蘇ってきたのだった。そして、心はずぐにガンダーラに掴まれてしまった。

ドバイから三時間半余りのフライトで、未明のイスラマバード国際空港に着いた。足止めを食ったせいで、パキスタン国内では二泊しかできない状況になっていた。空港ビルを出たところで声をかけてきたタクシードライバーと料金交渉する。この国では、料金メーター付きのタクシーは見当たらず、正規のタクシーと白タクの見分けもつかない。

ドライバに「貧乏旅行をしてるんだ」などと言って値切り、タクシラへ行くつもりなのだと話したところ、この車を一日チャーターしないかと誘ってきた。タクシラへは鉄道で行くつもりだったが、行った先での足を考えると、車を使うのも手だなと思い、相場とかけ離れないと思われる料金で手を打つ。

車が走り出すと、ドライバは、まず、「お前が大して金を持っていないことは分かっているの、リーズナブルな宿に連れて行ってやる」

と言って、イスラマバード中心街のマーケット近くにあるゲストハウスへ乗り付けた。おそらく、客を連れて行くくと宿主からコミッションを貰えることになっているのだろう。中心街といっても、イスラマバードは政治都市なので、閑静な住宅街という感じの場所だった。

イスラマバードから最も近いガンダーラ遺跡は、北西

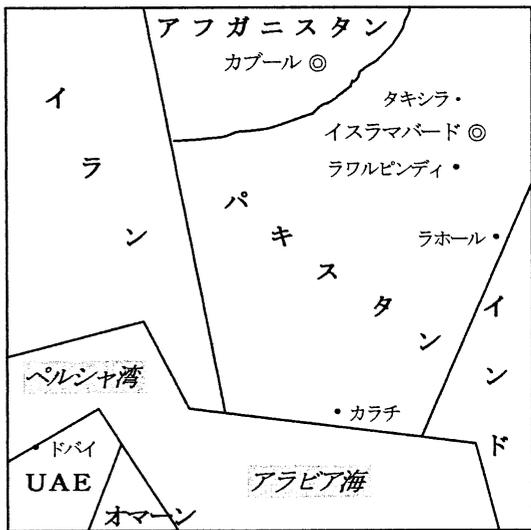
訪れた後、東へ進み、カイバル峠を越え、ガンダーラの沃野に入っている。

二二世紀になって、隣国アフガニスタンは、米軍の攻撃によってタリバン政権が崩壊した後、旅行者が容易に足を踏み入れられる状況になく、また、パキスタン領内であるガンダーラ地方においても、アフガニスタン国境に近い辺りは、武器の密造などが行われているようであり、治安上の不安があった。そこで、イスラマバードから近距離にあるタクシラを訪れることにしたのだった。

ゲストハウスを車で出発して三〇分余りで、隣の中核都市ラワルピンディに入る。イスラマバードは、パキスタン独立後、政治の舞台として新たに造られた甚盤目状の人工都市であり、経済機能は、交通要衝の地であり、軍都でもあるラワルピンディが担っている。

ここを通過する際、軍と警察の検問で止められた。ドライバが警官に何やら言い訳するように話す。白タクなので検査されてしまうのだろうか。兵士の一人が私に、パスポートを見せるように指示してくる。

結局、特に問題も起きずに検問をパスした後、ドライバに、「いつも、検問で止められるのか?」と尋ねると、



に位置するタクシラという町にある。

厳密にいえば、玄奘がガンダーラ（健駄邏）国を訪れた七世紀前半、タクシラは、同国の版図に含まれていなかったようではあるが、ガンダーラ文化圏に属していたことは間違いないと思われる。その頃、わが国では、聖徳太子が没し、飛鳥の都で蘇我一族が権勢を振るっていた。玄奘は、今のアフガニスタン・イスラマバードにあるバーミアン（梵衍那）国や現在の首都カブールの辺りを

「ムシャラフ大統領の暗殺を計画した爆弾テロがここであつたせいで、検問が厳しくなっているんだ」と答えてきた。

橋を通過するベルベズムムシャラフ大統領の車列を狙った爆破暗殺未遂事件は、旅発つ一〇日くらい前に日本でも報道されていたので知っていたが、こうして現地ですべて検問にあうと、この地の情勢について実感が伴ってくる。

それから四年後、ここラワルピンディで、ベナジールブット元首相が暗殺された。かつてクーデターで政権を追われた彼女の父、ズルフィカルアリブット元大統領が処刑されたのも、この地であつた。

宿を出てから一時間程度で、思ったよりも早くタクシラに到着した。

かつて、チンギスハーンやチムール、ムガール皇帝らが、現在のアフガニスタンからカイバル峠を越え、豊かな平野の広がるガンダーラへ進出してきた。そして、その遙か前に玄奘もやって来た。私は、その逆ルートでタクシラに入ったことになる。

ガンダーラは、こんなにも近くにあったのだ。仮に移動時間だけを合計すれば、日本から一日程度で辿り着ける計算になる。以前に中国の西安（長安）を訪れた際、

玄奘が持ち帰った経典を納めた大雁塔に上り、彼が辿った途方もない旅に想いを寄せたことがあったが、現代では、仮に自家用ジェット機を使える環境にあれば、一日もかからない距離なのだ。

タキシラに点在する遺跡を回り、首を切り取られた仏像や崩れた石造りの仏塔などを見る。ビルル・マウンドというタキシラ最古の都市遺跡は、紀元前四世紀にアレクサンドロス大王が東征の途上で訪れている。これまでアジアを西へ向かって続けてきた一連の私の旅も、ようやくヨーロッパ世界の英雄に出会える地点まで来ることができたのだと思うと、少し嬉しかった。

ガンダーラ遺跡群は、およそ往時の隆盛など追懐できないような状態ではないが、ユネスコの世界遺産に登録されている。イスラム化した他の国々でも仏蹟をいくつか見て回ったことがあるが、異教徒によって保護されている宗教的遺跡には、心を打つものがある。パキスタン政府は、観光収入を期待しているようでもあるので、隣国アフガニスタンのバーミアンで起きた巨大石仏爆破のような蛮行の心配はなさそうだ。

同行のドライバーは、仏教遺跡にもアレクサンドロス大王にも全く興味を持っていないようだった。運転しながら、

「結婚してるのか？」

いとこが他にもある。が、ドライバーは、

「ファイサル・モスクで終了という約束だった。俺を騙したな」

などと言って怒り顔だ。そんな約束も騙した憶えもないので、

「終わりにゃないだろう、まだこんなに明るいのにと」

一日チャーターという口約束だけで、正味何時間のドライブ等と細かく取り決めてなかったことを悔やんだ。せめて、出発前に、車で回る先ぐらいは確認して彼の目の前でメモでもしておくべきだった。

ドライバーは、

「警察を呼ぶぞ」

とか、

「お前を殺すぞ (I'll kill you)」
などと物騒なことを言い出す。英語で殺すぞと言われたのは、生まれ初めてのことだった。

ドライバーは、どうやら次の仕事控えているらしい。私が彼の意図どおりに動こうとしないのに業を煮やしたのか、

「本当に、警察を呼んでくる！」

と言ってきたので、

「どうぞ、勝手に呼んできなよ。一体、警察に何を頼む

「彼女はいるのか？」

「彼女と寝たのか？」

「彼女と何回ファックしたんだ？」

と立て続けに聞いてくる。モスリムは婚前交渉が禁じられているので、そうではない国から来た旅行者にいつも同じことを尋ねているらしい。そんな彼は、五児の父親だという。

昼過ぎにタキシラを後にしてイスラマバードに戻り、シャー・ファイサル・モスクを訪れる。このモスクは、パキスタンが独立した際、イスラム国家の誕生を祝って、サウジアラビアのファイサル国王の資金援助で建設されたもので、アジア最大級と言われている。感覚としては、日本武道館並みの大きさだろうか。中には入れなかったが、外周部分をブラブラ歩く。天気がいいので、家族連れやカップルも大勢散歩している。モスクの前は広々とした原っぱになっており、晴れ渡った青空の下、清々しい。今回の旅で初めて爽快な気分になることができた。

ちよつとゆっくりし過ぎたかなと思つて車に戻ると、ドライバーの機嫌が悪い。

「今日は、これで終わりだ。宿に戻ろう」

などと言う。冗談じゃない、まだ午後四時だし、回りが

んだい？」

と答えると、私が動じないのが予想外だったのか、彼はやけくそ気味に車に乗り込み、モスク前の広場を走り出した。まだチャーター料を彼に渡してないので必ず戻ってくるだろうが、質の悪い仲間でも連れてきたら、ちよつと厄介だなと思つていると、間もなくして帰ってきた。車の中を覗いてみると、彼一人だけだった。

「どうした、警官は連れて来てないのか？」

と冷やかし気味に声を掛けると、それには答えず、

「いいから、今日は終わりにんだ。終わり！」

などと相変わらず不機嫌な顔で言う。

私の宿泊先は彼に知られているので、後で嫌がらせでもされたらかなわないし、彼がどんな素性なのかも実のところよく分からないので、こころでやめにしておくのが賢いかもしれないと思い、車に乗ってやることにした。宿に戻ると、ドライバーは、ちよつかり、フロントに置いてある宿の名刺に自分の名前と電話番号を書いて去っていった。また俺を雇ってくれということか。

翌日、イスラマバードを見下ろせる小高い山に登った。前日、車で行き損ねた所だ。いい陽気だったので、宿から出て歩いていくことにした。

山の麓には軍と警察の検問所があったが、じろりと一

警されただけで、特に何のチェックも受けなかった。道を間違えていないか兵士に確認しようとしたが、英語が通じないようだったので、警官に聞き直す。かつてイギリスが宗主国だったため、流暢な英語を話す人がいる一方で、全く英語を解さない人も少なくないようだ。

アスファルト舗装された車道は、途中から本格的な峠道になり、小一時間で展望台に到着する。一応、観光地はずだが、人影があまり見当たらない。声を掛けてきた気さくな若いパキスタン人に尋ねてみると、

「ムシヤラフ大統領に対するテロがあったせいで、市民が怖がって外出しなくなったからだろう」

と言う。そこで、ムシヤラフ大統領について聞くと、

「彼は、勇敢で、いい人だ」

との答え。軍のトップとして無血クーデターによって政権を奪取した彼は、海外メディアでは独裁者として紹介されることも多いが、国内では案外支持されている為政者のようであった。

翌朝、宿をチェックアウトする際、宿の主人に、パスポートのコピーを返してくれと言ったところ、そのコピーを更にコピーしたと思われる不鮮明な代物を手渡してきた。チェックイン時、フロントにパスポートを預けた

古自動車関係の仕事をしていたとか。彼の話によると、メッカへの巡礼の時期なので、こころ、二か月間、空港は混み合うのだという。

帰路もドバイ経由であったが、往路とは逆に、初めから乗換えに一日近い余裕があったので、再びドバイの街に出てみた。

ふと、海を見なくなった。旅の終わりにペルシヤ湾を見ておきたいと思ったのだ。ドバイを紹介するお馴染みの写真や映像では、決まって海沿いに建ち並ぶユニークな外観のホテルが目を引き。そんなジュメイラ・ビーチへ行ってみた。

やはり砂漠の国だけあって、いい砂なのだろう。豪華ホテル前のビーチには素晴らしい砂浜が広がっていた。まさにビーチリゾートといった趣である。

砂漠に立ち現れた人工都市を縁取るリゾートホテルの群れ。同じイスラム国ではあるが、パキスタンとは対照的に活況を呈し、もの凄い速さで成長するこの都市の勢いを端的に示す風景であるように感じられた。

この旅から帰国して半年ほど経った頃、ムシヤラフ大統領がある新聞への寄稿で「世界は生きていくのに極めて危険な場所になった (The world has become an ex-

actly dangerous place to live in.)」と語っていた

(Muslims must do their part to promote peace. International Herald Tribune - Asahi, 2004. 6. 7).

そのような状況は、望ましくない方向へ更に進み、現在のパキスタンは、動乱の様相を呈しているようにさえ見える。

他方、ドバイは、無尽蔵とも思われるアラブのオイルマネーが続々と流れ込んでいると言われ、世界の金融センターを目指して驚異的なスピードで発展し続けている。街が指数関数的に上空に膨張し、地上八〇〇メートル以上の超々高層ビルまでもが完成しつつある。

私が訪れてから、僅か四〜五年しか経っていないのに、両国の対照的な変化の早さには、驚きを禁じ得ない。

ゴダイゴが、

「自由なそのガンダラ 素晴らしいユートピア」と歌っていたガンダラ地方は、今では訪れるのを躊躇してしまふような地域情勢になってしまった。

現代のユートピアは、砂漠の入り江に突如として出現した摩天楼の都市で実現されるのだろうか。

文人

第 50 号



The Literati No.50 2008